

ディアスポラの「帰還移住」と  
ホスト社会における多文化共生の課題：  
旧ソ連地域におけるコリアン・ディアスポラ（コリョ・サラム）を事例に

李 眞 恵\*

Diasporic Return Migration and Challenge to  
Multicultural Symbiosis in Host Society:  
A Case Study of Korean Diaspora from the Former Soviet Union,  
*Koryo Saram*

Jinhye LEE

The formation of a diverse and complex spread of diaspora and minority groups worldwide, as well as the establishment of their identities, must be reconsidered. This study focuses on the challenges faced by a diaspora that re-migrated or returned to their historical homeland in the host society, and what knowledge can be obtained from multicultural symbiosis research today. This study aims to investigate the migration process of a diaspora returning to its historical homeland and its integration into the host society by using the Korean diaspora of the former Soviet Union, *Koryo Saram*, as a case study. It also examines the possibility of multicultural coexistence. The following three aspects are reviewed: First, the push factor in the country of residence and the pull factor in Korea are identified by taking the case of *Koryo Saram* from Uzbekistan, which has the largest immigrant population in the former Soviet Union, to understand the basic structure of the migration of *Koryo Saram* to South Korea. Second, the process of integration into the host society is analyzed by examining changes in acceptance policies, such as the legal status the Korean government has given to them, amid the rapid increase in the number of *Koryo Saram* moving to Korea since 2007. Third, the challenges of integration and multicultural coexistence in the host society due to the rapid migration of *Koryo Saram* and formation of concentrations of migrants' residences in Korea are examined.

---

\* 立命館大学衣笠総合研究機構助教  
jlr22051@fc.ritsumei.ac.jp

キーワード：コリアン・ディアスポラ、帰還移住、ホスト社会、社会統合、多文化共生

Keywords: Korean Diaspora, return migration, host society, social inclusion, multicultural symbiosis

## I. 課題の所在と研究の目的

20 世紀末にグローバル化時代に入ると、国民国家の境界を越える人の移動が急激に増大した。そのようなトランスナショナリズムの拡散は、ディアスポラ概念の使用を広めることとなった（早尾, 2020）。出自を同じくしながらも多様な国籍と言語圏に散らばったディアスポラの暮らしは、近代的な国民国家に同化されきれない存在として、次第に重要性を増している。母国からの移住、居住国での差別、母国への帰還といったキーワードで特徴づけられる近代的概念では、超国家的移住による多重アイデンティティを持つ現代的ディアスポラを説明するには限界がある（李, 2022）。ネーションとは作られた「想像の共同体」であるというベネディクト・アンダーソンが提起した概念が今日では広く受容されているが、これらを区分していた血縁や言語などの境界の弱化はディアスポラに対する新たな観点を要求している。また、グローバル時代における移動によって形成された多様なディアスポラ集団の問題解明が急がれる。一方、2020～2023 年の国際的なコロナ禍によって、各国ではさまざまな多文化政策の限界が露呈し、民族・文化間の葛藤や差別といった国民統合をめぐる矛盾が噴出し、社会構成員間の葛藤はさらに深刻化した。ポストコロナ時代にも各国における人口構成の変化と社会・経済的不平等の深化による移住者の増加が予想される中で、統合と葛藤、少数民族共同体の拡大などによる変化に対して、学術的な捉え直しと新しい対策が要求されている。

現在進めている研究プロジェクトの問いは、ディアスポラ・マイノリティ集団の形成やアイデンティティ構築が再考を求められている現在において、歴史的故国に再移住または「帰還移住」したディアスポラがホスト社会ではどのような問題に逢着しているのか、また、その事例研究から、今日の多文化共生に資するどのような知見を得られるのか、である。したがって本研究報告では、旧ソ連地域におけるコリアン・ディアスポラであるコリョ・サラムを対象に、歴史的祖国に帰還したディアスポラの移住とホスト社会での統合過程を解明し、多文化共生の可能性について報告する。研究プロジェクトの具体的な目的は次の 3 点である。

第一に、コリョ・サラムの韓国への移住現象の基礎的な構造を解明するために、旧ソ連地域の中でも移住人口が最も多いウズベキスタン出身のコリョ・サラムを事例に、居住国におけるプッシュ要因と韓国におけるプル要因について通時的に明らかにする。第二に、2007 年以降コリョ・サラムの韓国への移住が増加しているなかで、韓国政府がどのような法的地位を付与しているのかといった受け入れ政策の変化を検討することで、ホスト社会による統合の構造について分析する。第三に、韓国国内のコリョ・サラムの移住増加と集中居住地の形成によるホスト社会における統合と多文化共生のための課題について考察する。以下の各節は、現在までに得られた関連する研究成果についての報告である。

## II. コリョ・サラムの帰還移住に関する理論的支柱に関する考察

現代におけるディアスポラ共同体は、子孫世代に国際移住に必要な情報と基本的な経済的支援を

提供し、その成長・拡大が加速している (Colier, 2013)。非自発的移住を経験した彼らの後の世代の歴史的故国への自発的帰還移住は複雑化、多様化している。これらディアスポラの歴史的祖国への「帰還」は現代のディアスポラ移住の傾向の一つであり、移住の主要因としては経済的動機が指摘されてきた (Markowitz and Stefansson, 2004; Tsuda, 2003; 2009; Tsuda and Song, 2019)。すなわち、既存の多くの研究を通じて、彼らの移住には経済的動機が支配的な役割を果たしていると認識されてきた。しかし、多様なディアスポラ集団の帰還移住形態は、歴史的故国の受け入れ政策と制度によって変わる。したがって、帰還移住の要因を検討するためには、移住者の出身国と移住先であるホスト社会の両方の移住要因に対する綿密な検討と総合的な分析が求められる。

そこで、本節では、近年、ウズベキスタン・コリョ・サラムの韓国への移住が急増した事例に注目し、ディアスポラの帰還移住の要因について検討した拙論文 (Lee, 2023a) を要約する。同論文では、コリョ・サラムの帰還移住の要因をウズベキスタンのプッシュ要因と韓国のプル要因を中心に分析した。

まず、ウズベキスタンのプッシュ要因については、非基幹民族を排除した基幹民族中心の国家統合政策のうち、言語政策を中心に検討した。ウズベキスタン独立前後の言語改革は、ウズベク語を唯一の公用語と宣言し、ロシア語の使用集団に対する配慮なしにウズベク語による公教育を採択するという急速で熾烈な過程を経てきた。この過程で、非ウズベク人の海外流出が増加した。このような同国内の言語改革の強度が高く、急速な政策の動因となるのは、圧倒的である基幹民族・ウズベク人口の重みである。基幹民族の人口が基幹民族中心のネーション・ビルディングにとって強力な動因になるということを、中央アジア地域で基幹民族人口が最も少ないカザフスタンと比較して立証した。そこでは、言語政策で類似の路線を採択しながらも、その施行において大きな違いが生じたのである。

さらに、ウズベキスタンの言語改革による非ウズベク人の海外流出に関連して、急速に導入されたウズベク語による公教育政策がコリョ・サラムの移住要因に影響を及ぼしたことが明らかになった。また、このような移住の現象を、ウズベキスタンの基幹民族中心の言語改革によって直接的に韓国への移住が増加した事例数と照らし合わせて示すことによって実証した。

次に、コリョ・サラムの帰還移住のプル要因を在外同胞関連の韓国政府の政策に注目して検討した。特にコリョ・サラムを政策的に「同胞」と認定するようになった過程と政府の関連法制定などを分析し、コリョ・サラムの韓国移住が急増するようになった要因だけでなく、コリョ・サラムの受け入れ政策の具体的な内容を明らかにすることができた。また、多様な歴史的背景を持つ越境や移動、グローバル化による様々なアクターの出現、韓国内外での彼らの政治的位置などが、在外同胞法が同胞に地域別かつ差別的に適用されるという方式に寄与したことを、提示した。その結果として、韓国政府とコリョ・サラム・ディアスポラの関係は差別と排除によって形成され、階層化が生じていることが判明した。

### Ⅲ. コリョ・サラムのホスト社会への統合と多文化共生における理論的考察とその成果

本節では、次の2点に焦点を当てる。第一に、ウクライナから避難したコリョ・サラムの韓国への移住、第二に、帰還移住したコリョ・サラムの韓国への定着とその現状、である。以下、それぞれについて報告することにする。

まずは、ロシア・ウクライナ戦争勃発後、韓国に避難したウクライナのコリョ・サラムを韓国政府が「難民」または「同胞」としての地位の中でどのような法的な範疇で受け入れているのか、また、これに対するコリョ・サラムの対応はどのようなものなのかを中心に、韓国の難民および同胞政策の現況と課題について検討した。具体的には、以下の2つの側面を分析した。

第一に、韓国の難民政策を検討した後、難民の規定上、ウクライナのコリョ・サラムを受け入れるかどうかの議論があって、その結果としてのコリョ・サラムの具体的な事例がどうなっているかを検討した。現地調査を通じて、韓国での難民認定率の低さと政策上の複雑で高い進入障壁によって、ウクライナ出身コリョ・サラムの実質的な難民申請数はゼロに近いごく少数であり、彼らは難民としての地位を得るのではなく知人や親戚および家族がすでに居住しているコリョ・サラムコミュニティがある地域に流入している、ということが明らかとなった。第二に、ウクライナ出身のコリョ・サラムの、同胞としての受け入れの可否とその具体的事例を検討した。歴史的な経緯によって無国籍者が多くの割合を占めている同国出身のコリョ・サラムの場合、彼らが同胞の範疇に含まれにくい理由と現況、そして韓国政府の措置について検討を行った。また、現行の同胞政策上、ウクライナ出身のコリョ・サラムを同胞と認める条項が存在しない点も指摘した。さらに、既存の在外同胞規定では出身国家によって同胞適用の基準が異なること、そして彼らの言語、文化、歴史などに対する十分な検討もなしに発給された同胞ビザは、現実的な限界と制約が社会的なイシューとして提起されるたびに臨時的に修正され適用されてきたという点も明らかとなった。すなわち、韓国で同胞として生活を営んでいく上で、彼らが現実的な問題に直面するたびに、政策も一時的な修正を繰り返してきたということである。ウクライナ難民を事例として検討した本研究は、韓国社会が同胞を受け入れる政策の場当たり的な方便性、難民、ひいては移民を受け入れることの問題性などを示唆している。これらの知見については、別の拙論文（Lee, 2023b）で詳述した。

次に、帰還移住したコリョ・サラムの韓国への定着に焦点をあてて、韓国社会の統合の一側面を調査し、検討した。コリョ・サラムの韓国への移住の急増は、韓国社会への統合を意味するのか、そうでなければ、統合を阻害する要素は何かという研究課題を設定し、帰還コリョ・サラムの法的地位と受容に対する政策的側面と、これに対するコリョ・サラムの実質的な対応の側面を検討した。これに関しては、2023年2月から3月までに韓国の安山、仁川、天安、公州、光州で現地調査を行い、得られた結果のうち、統合の阻害要因を整理すると次のようになる。

第一に、同胞規定におけるコリアン・ディアスポラの出身地域別の違いと、コリョ・サラムの出身地域別の違いがそれぞれ存在したことが挙げられる。出身地域別同胞の入国制限により、旧ソ連地域のコリアン・ディアスポラのコリョ・サラムは在外同胞法が改正された2007年から「同胞」として韓国への入国が可能になった。また、コリョ・サラムは出身地域、年齢、世代によって滞在ビザの適用基準が異なる。

第二に、特定コリョ・サラム支援団体の政府機関の委託化とそれを巡る各地域団体間の競争の構図と軋轢関係の形成、そしてコリョ・サラムの子弟に対する公教育の提供における限界といった問題点が挙げられる。また、中央政府の予算を確保するために地方団体がコリョ・サラムを対象化していること、コリョ・サラム集団住居地が社会的に烙印を押されていること、集団居住地内の非コリョ・サラムが相対的剥奪を感じていることなどを、統合を阻害する要素として把握することができた。この他にも、児童のための公教育上の教育プログラムの場当たり的な性格、韓国語を除くすべての教育課程の排除、非連続的な予算編成の発生、コリョ・サラムの選挙権不在などの問題も浮

かび上がってきた。韓国で、コリョ・サラムには法的にも制度的にも「私たち」ではなく「他者」の地位が付与されていた。韓国社会で彼らは外国人ではない「同胞」の範疇であるにもかかわらず、社会的にも当分は韓国の住民たちとは差別的な扱いを受け、他者性を維持するものと予想される。

#### Ⅳ. 課題と展望

筆者はこれまで、ディアスポラ集団が歴史的に規定されてきた「想像の故国」を共有しながらホスト社会の中で居場所を求めて生きてきた現実を前提とし、さらに彼らの一部が「故国」に再移住（「帰還移住」）することによって「二重のディアスポラ」となっている事例に着目した。特に、旧ソ連地域のコリアン・ディアスポラであるコリョ・サラムの韓国への再移住に焦点を当て、彼らが故国であるホスト社会に流入する過程を解析し、ディアスポラの多様な存在様式の実態を考究してきた。さらに、本研究はグローバル化以降の21世紀に特徴的な二重ディアスポラ論の事例研究を通じて、国際的な多文化共生研究に寄与することを目指している。

上記の研究成果は、ディアスポラの帰還移住、故国への統合、多文化共存に関する研究の土台を用意しうるのであろう。また、コリョ・サラム・ディアスポラの韓国への「帰還」は、ホスト社会での統合、ひいては多民族共存を考慮する地域社会、国家、地域のますます多様で複雑な要求をどのように受け入れるかに関して、多文化共生研究の具体的な事例を提供するものと期待される。その一方で、今後、ウクライナ出身のコリョ・サラムを含む帰還コリョ・サラムの法的地位上の問題をどのように解決するかについて、当事者からの多様な事例を中心に検討を進める予定である。また、帰還コリョ・サラムが韓国への定着を希望する場合、彼らが好む定着形態がどのようなものであり、韓国社会によってどう統合されるのか、それとも移住者が再び新しい移住を考慮するのかなど、より多くの側面を分析する必要があるだろう。

さらに、韓国社会が現在経験している少子化と地方人口の格差を解消するために行うことができる措置が何かを検討する中で、韓国政府によるその方案の一つが移民の受け入れならば、移民を受け入れ、統合するにあたっての韓国社会の制度的側面と実質的な側面の両方を総合的に検討していく。さらに、移民を含む多文化共存のために提示される政策と移民の現実、ひいては韓国が果たして社会統合に成功しているのかも検討していく必要があると思われる。これは韓国社会が移民をどのように統合しているかを理解する上で重要な手がかりを提供すると考えられる。また、それによって移民の受け入れと統合に多少消極的な東アジアでの多文化共存の在り様を計る物差しとなることができるだろう。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費助成 研究活動スタート支援「『想像の故国』に戻って：ディアスポラ再移住とコロナ後世界の多文化共生の課題」（課題番号：22K20124、2022.8～2024.3）、同・若手研究「国境をまたぎ多様化するディアスポラ移民たち：韓国・日本の多文化共生の課題を中心に」（課題番号：23K17115、2023.4～2026.3）による研究成果の一部である。

#### 参考文献

李眞恵（2022）『二つのアジアを生きる：現代カザフスタンにおける民族問題と高麗人（コリョ・サラム）ディアスポラの文化変容』ナカニシヤ出版。

早尾貴紀（2020）『希望のディアスポラ：移民・難民をめぐる政治史』春秋社.

Colier, Paul. 2013. *Exodus: Immigration and Multiculturalism in the 21st Century*. London: Penguin.

Lee, Jinhye. 2023a. "Why do Diasporas Re-Emigrate to their Historical "Homelands"? A Case Study of Koryo Saram's "Return" from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea" *Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University*, 5: 51-65.

———. 2023b. "Should Korean Diaspora Evacuees from Ukraine be Considered "Refugees" or "Ethnic Returnees" in South Korea?" *Ritsumeikan Journal of International Relations and Area Studies*, 57: 23-42.

Markowitz, Fran and Anders H. Stefansson, ed. 2004. *Homecoming: Unsettling Paths of Return*. Lanham: Lexington Books.

Tsuda, Takeyuki. 2003. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.

———. 2009. *Diasporic Homecomings: Ethnic Return Migration in Comparative Perspective*. California: Stanford University Press.

Tsuda, Takeyuki, and Song, Changzoo. 2019. *Diasporic Returns to the Ethnic Homeland: The Korean Diaspora in Comparative Perspective*. Cham: Palgrave Macmillan.